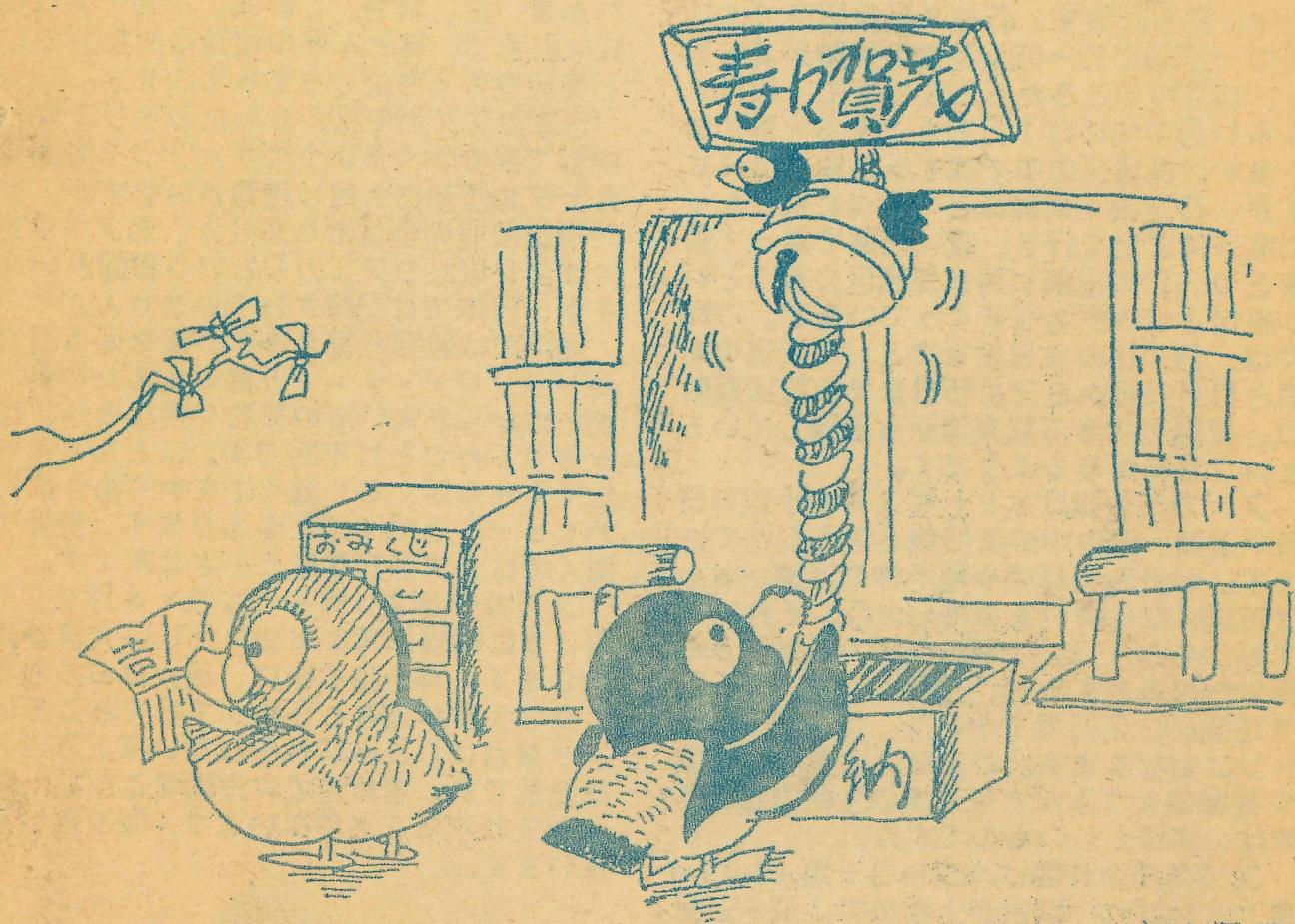


行徳野鳥観察会 友の会会報

すずかん通信 30

1985.2



市川拓画



特集 スズガモ

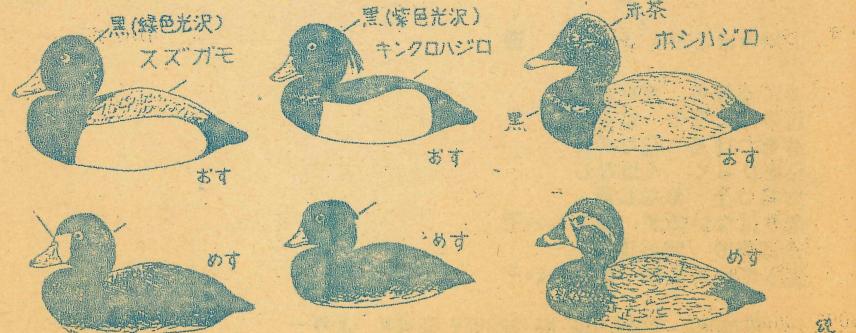
保護区はいこいの場所

冬の保護区の水面を黒々とおおっている大群はほとんどがこの種類です。数は?うーん、このところかぞえる自信がなくてお答えできません。ゴメンナサイ。ゴマンといふことだけは確かなのですが。

日本には冬鳥として渡来し、波の静かな内湾に見られます。行徳鳥獵保護区では9月中下旬に10-50羽程度の先駆が姿を見せ、10月中旬ごろからふえてきて、10月末から11月中旬には1万羽をこえる大群になります。保護区の中ではずっと休んでいます。が、日没後1時間ほどで次々に飛びたって東京湾に出て行き、夜、浅瀬で潜って餌をとり、日の出前に再び保護区に戻るという規則正しい生活をおくっています。これには、日の出から日没までという銃猟の時間と11月15日から2月15日までの狩猲期間に、銃猲のできる東京湾から避難しているという意味があるようです。

スズガモの餌はホトトギス等の小型の貝類や藻類、泥の中の有機物と考えられています。おそらく草張や細毛沖の浅瀬がおもな餌場になっているのでしょうか。それにしても、もし1日に1羽のスズガモが50gの餌をたべるとすると、20羽で1kg、2千羽で100kg、2万羽で1トン、10万羽では5トンにもなります。こんなに大量の小動物や有機物をうみだす東京湾の生命力というのは、すばらしいものですね。

スズガモの仲間はハジロガモ類(Aythya属)と呼ばれ、潜水が上手です。飛ぶと翼



2(163)



蓮尾純子

に白い帯が出て、また翼の裏が純白なので"ハジロ"の名がつきました。ホシハジロ、キンクロハジロがふつうに見られるほか、オオホシハジロ、クビワキンクロ、アカハジロ、メジロガモがごく稀に記録されています。なお世界では合計13種類があり、どれも黒、白、灰色、こげ茶、茶色という単純な配色で、ほとんどの種類は灰黒色の足と青灰色のくちばしをもっています。

日本のスズガモは、おもにシベリア東一中部で巣をつくるようです。アラスカからカナダ北西部にも同じ種類がいますが、まだ標識回収の例はありません。北アメリカにはよく似たコスズガモという種類がありますが、日本では記録されていません。

漢字では鈴鴨と書きます。風を切る羽音がリリリリ。。。と聞こえるためか、またはたくさんいるので数々鳴なののか、はっきりしたことは不明です。ほとんど声をたてませんが、ごく低くささやくように"ハヒュー"と鳴くことがあります。野外で聞くのはまず無理なほど小さな声です。

スズガモが北へ帰るのは3~4月で、そのころには東京湾におびただしい大群が集結します。沖合はるかに、巨大なおろちのような大群が黒々とうねって行くところは、一見目にしたら忘れられないほどみごとな光景です。埋め立てや汚染でこうした眺めが失われることのないよう、祈りたいと思います。

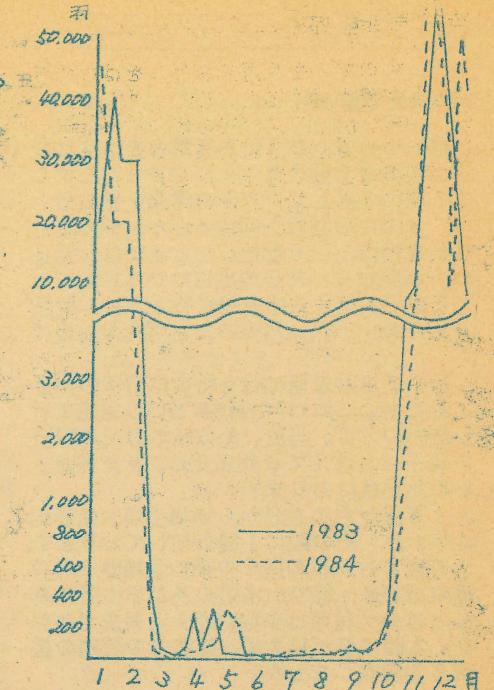
スズガモ Q&A

Q. 観察舎でスズガモはいつ見られますか?

A. 10月半ばからふえはじめ、翌年4月末まで見られます。大群はふつう11月半ばから2月ごろまで滞在し、何日か雨が続いた後、保護区に戻らなくなります。ただし10-30羽位が夏も残っており、体が弱ったものと思われます。ピークは1月です(グラフ参照)。昨冬、一昨冬は工事等の影響か、大群が見られない日の方が多く、さみしいかぎりでした。

Q. 何羽ぐらいいるのでしょうか?

A. 過去、NHKがヘリコプターから撮影して数えたところ、10万羽をこえるという結果でした。今年は少ない日で2万羽、多い時には7、8万羽と言われていますが、くわしくは写真判定でなければわかりません。なお3月に幕張沖で22万羽と見積もられた群れが撮影された事があり、3~4月の渡去期には東京湾にスズガモが大集結するようです。こういう大群は岸近くに寄ることはほとんどなく、まことに見られる場所は世界でも少ないかも知れません。



Q. 夏はどこに行くのですか?巣やひなは?

A. 日本のスズガモはカムチャッカからシベリア東一中部で繁殖していると考えられています。5月末から6月ごろ、水辺のしげみや石の間など開けた場所に簡単な巣をつくり、綿毛をしきつめて卵を1~15個うみます。ヒナは全身ぶかぶかした黒褐色の綿毛がはえていて、胸から腹は黄色っぽい色をしています。カルガモなどと同様、子育てはめすだけの仕事でヒナは5~6週間たつとひとりだちします。よく何つがいものが近くで巣をつくるそうですので、やたら群れたがるのはうまれつきかも知れませんね。

Q. ディスプレイ(求愛行動)は?

A. 日中はほとんど目につきません。おそらく薄暮時や夜やるのでしょうか。本によればおすは頭を上にふり上げるようにして、ハヒューと低く鳴き、めすはやさしくまわって、何回か頭を上下させ、チュチュブと鳴くことがあります。声は非常に小さく聞きとりにくいものです。



3(164)

スズガモエッセイ

年頭雜感

早いもので、もう野鳥観察舎をはなれて4回目の春を迎えることになりました。この「初日の出とスズガモの帰還を見る会」は、すでに9回目を迎えるとか。55年2月に野鳥担当として着任したときには、元旦の6時前から、初日の出はわかるにしても、力モが帰ってくるのを見に行くとは、酔狂な人々の中に入ったものだと考えたものです。

初めて塩浜岸壁に行ったのは57年の元旦でしたが、これは半分仕事という意識で行ったものです。当然、その時の力モの帰還の様子はおぼえておりません。ただ寒かったのが記憶にあります。

1年3ヶ月の在任から清掃工場へ転じ約4年おり、その間に1回参加しております。

昨年4月、市の南?の端の工場から北の端の博物館へ移り、水辺の鳥から山野の鳥(とはいえ種類は少ないが)と対象がかわり、木陰で姿が見えず、鳴声での識別の重要さも認識しました。

渡井章三

4年ぶりに暮れの29日から年末休暇がとれるなど気持ちの余裕?からか、久し振りに初日の出を見に行く気になり、行きつけの飲み屋のマスターと意気投合(いや、彼が車を持っているので)し、元旦の5時に千葉の自宅をで、塩浜についた時にはまだ6時前であった。

一刻一刻、空に明るみがまし、色が変わっていく様は、足から伝わる寒さも忘れるようであった。まだ、中空に暗さが残っている頃、一群また一群、大きな群、小さな群、その羽音から名付けられたとかいうスズガモが、頭上を保護区に帰って?いく。「例年より多いのではないか」と話し合いながら、ポケットに忍ばせたウイスキーを飲みまわしたもので、これも目的の一つであったかも知れない。

水平線から直接でた今年の日の出も感動的であった。そして、観察舎直前の水面を埋めつくした力モの群れ、いつのまにか酔狂な人々の中に入っている自分を見つけるような今年の元旦であった。

翔音

今年の友の会初行事の「初日の出とスズガモの帰還を見る会」は、天気に恵まれて200名の方が参加された。日の出前の朝やけの空に、スズガモの大群が鳥雲となって保護区へ戻るときの荘觀さに改めて感激した。このスズガモの大群が来冬も、その次も。。。ずうーと東京湾にやってきて、保護区で羽を休めてもらいたいものだ。

塩浜海岸よりながめる赤く輝く浅海は、県企業庁によって埋め立てられ、下水処理場、住宅地、工場用地、廃棄物捨て場、公園、人工干潟などにされようとしている(市川2期埋め立て約700ha)。

また、今年の3月には、いわゆる新浜(しんはま)らしさ(湿地、アシ原、ハス田を残していた妙典地区が、市街化区域に編入されようと準備がされています。(市としては、湿地を残した公園を造るといっている。)

都市計画のわくを破り、蓮田や湿地を大きく残した公園をぜひつくってほしいものです。漁業や農業が生き生きと生きている町づくり、湿地とゆとりのある町づくりをしてほしい。人口増によるマイナスを、自然(湿地)と文化を失うマイナスを、十分考えてみましょう。

田久保晴孝

昨年は、約5万人もの来館者がありました。それぞれの人に、鳥を見る楽しさ、自然のすばらしさ、大切さを広めることができたと思っています。現在、三次館長さんら4人の職員の方で、広い観察舎と保護区の管理とケガをした鳥達の世話をしています。ぜひ来館のおりには、一般の方の観察の手助け、ゴミ拾い等の環境美化にご協力をお願い致します。たくさんの方に、野鳥のすばらしさ、自然のよきを知ってもらうことが、自然を守る力になっていきます。たくさんの方を誘って、何回も来ていただきたいと思います。そして水鳥の生息地を守り、造ることにもいろいろな形でのご協力をお願い致します。

友の会では、今年もたくさんの方を用意しています。よりよい"すずがも通信"をつくりたいと思いますので、御意見、感想などをどんどんよせ下さい。

たくさんのわいわいられた野鳥に代わって、生息地の保護を訴えていきましょう。5万羽のスズガモの羽音は訴えています。"湿地や海はヒトだけのものではありません"。

天界からの音楽

成沢房子

新聞に載ったたった十行の記事、それを探りに元旦の3時、暖かい寝床を必死の思いでぬけ出して「初日の出とスズガモの帰還を見る会」に参加しました。真暗な岸壁で足踏みしながら待つこと少し、薄明の海の彼方の黒い点。。。 「来た、来た!」の声、寒さも忘れて必死で双眼鏡を合わせました。頭上を過ぎゆく時のサワサワサワとい微かな羽音は無限の天界からの絶妙の音楽とも受けとれました。のけぞる様に見送り次々と押しよせる群れにただ感激。。。それから日の出を待ち朱色の初日が雲をやぶり金色の光を放った時は息がつまる思ひがしました。毎日くり返される自然の営みにすっかり離れて人工の中で明け暮れていける生活を深く省みました。

ひきつづき野鳥観察舎へと場所を移し立派な建物からのんびりと浮かぶ鴨の群れや遠い鉄塔に悠然ととまる「はやぶさ」の姿

など望遠鏡でゆっくり見ることができます。

お振舞の豚汁やおしるこにすっかり満足して帰宅しました。会の方々のお陰で自然の姿に接し、すばらしい1985年の元旦を追えられたことは永く忘れられない思い出と感謝致しております。



鳥の国から 一観察台便り

あけましておめでとうございます。元旦恒例の初日の出の会も、雲一つない上天気で実に見事ながめでした。スズガモ君たち、今冬はどうやら落ちついてくれるようではあります。今からでも（たぶん）遅くありません。がんばって朝の6時に塩浜岸壁までお出かけください。スズガモの朝帰りの光景には、思わず合掌したくなるような壯麗さ（オーバーかしら）があります。

さて、観察台が寒いので（事務室は暖房がきいているので一怠慢！）望遠鏡にむかう時間がとみに少ないこのごろ。スズガモは1月12日からやや少なくなつて3~4万羽というところですが、相変わらずみごと。1月12日、新浜鴨場内の鳴が全部出て行つてしまふという大椿事があって、場長さんが困りきつておられました。

オオハシシギ健在（1羽）。オオサギが20~40羽位越冬。ふつうは鳴場内心字池の中の島のマツの大木で日中ねぐらをとっています。

アラスカ便り

アラスカ大学、フェアバンクス校に留学中の松木謙君から元気なお便りが届きました。

フェアバンクスに来て早くも3ヶ月余、昨日で期末試験も無事終わりました。寝の連中はほとんど皆さざと家に帰ってしまったので、こちらに来て以来初めてといつていいほど静かな夜を楽しんでいます。これから1月13日まではまた自炊生活に戻ることになります。今日、友人と食料品を買い出しに行ってきました。去年は1年間自炊をしていたのに、たった3ヶ月半自炊から遠ざかっていただけで、買い物のコツ等をすっかり忘れてしまい、スーパーへいぶんまごついてしまいました。

アラスカの寒い話を少し。。。先週からいわゆる“酷寒期”が例年より1ヶ月も早く始まり、気温が-32°C~-35°Cにまで下がりました。ミシガンでも明け方に-35°Cまで下がることはあったのですが、昼は

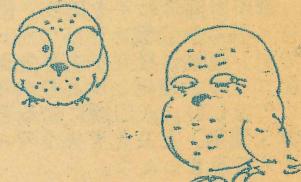
蓮尾純子

嚴冬期は休戦中らしく、けんか好きのバソが小グループで餌をとっています。えさ場で11羽までかぞえました。キジも雄同士雌同士で連れ立っているようです。

1月5日、コミミズク救出作戦をやりました。高さ15mの空會廊の天井近くをひらひら飛びまわるコミミズクを追って、網をはった竹ざおを12mのクレーン上でふり回すオソロシさ。高所恐怖症になりそう！でも無事保護し、3日後、150g近くふとらせてから放鳥。角、原、吉田君ご苦労様でした。

枯草色の景色の中で水仙やヒガンバナの葉だけ、つやつやと緑色。オオイヌノフグリが咲き出すのも間もなくでしょう。

水路の凌潔工事（行徳高校付近）がはじまります。御迷惑をおかけしますが、どうぞ事故などのないよう、よろしくお願ひいたします。



松木 謙

いつも-23°C~-26°Cだったので、それほど寒い思いをしなかった様な気がします。しかしここでは日中でもあまり気温が上がりず、1日中-35°Cの寒さが続きます。今週の日、月、火と雪が降って、1m位積もりました。雪が降っている間は暖かく、0°C前後でした。ちなみに今夜は-26°C~-28°Cです。天気予報によると明日はまた雪が降るとか。。。

太陽はたぶん10時か10時半位に顔を出して、3時間位、もうしわけ程度に姿を現し2時半位にはもうしずんでしまいます。黄道がほとんど水平に近いので、日の出前と日の入りの後1時間位はなんとなくうす明るく、あたりが明るい時間は実際の日照時間よりもずいぶん長いです。

最後に過去2ヶ月に見た鳥のリスト：ベニヒワ、コベニヒワ、ワタリガラスだけ。

それでは又。。。おっと、うっかり忘れるところでした。

よいお年を！

里子 鳥紹介録 No. 8

*タヒバリ

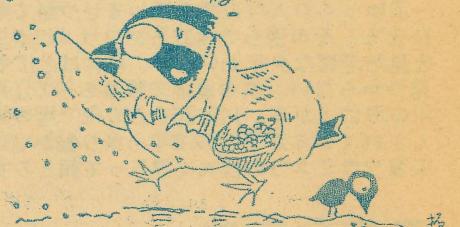
北風の中、保護区を歩いていると、右や左からいろんな小鳥が飛び出します。タヒバリは北池、千鳥橋等の周辺で見ることができます。漢字では「田禿鶲」。英名は「Water Pipit」。「Pipit」は「ちゅうちゅう鳴く」という意味でヒバリの仲間を指します。「水辺のヒバリ」という意味ですね。学名は「Anthus spinosus」。属名の「Anthus」はギリシャ語の「anthos」が語源でセキレイのことを指します。ギリシャ神話で青年アントスは父親の馬に殺され、鳥に変えられました。アリストテレスの「動物誌」には「アントスは馬と敵同士である。アントスは馬の声を真似し、馬のまわりを飛んでこわがらす。アントスは川や沼のほとりに巣を作り、美しい色で。」とあります。種小名の「spinosa」はイタリア語「spispola」（タヒバリ）の縮小形です。タヒバリは名前は「ヒバリ」でもセキレイの仲間で、その証拠に地上を歩いている時、立ち止まって尾を上下に振る、あのセキレイ類特有の動作をします和名と英名では、その姿からヒバリの仲間と見たわけですね。

荒井八太

*カシラダカ

この鳥も冬の行徳を訪れる小鳥の一種です。漢字では「頭高」。地上で餌をあさっている時、人などが近づくと飛び立つて低木や高木の梢などに止まり、驚くと頭部の羽を羽冠状に立てる習性があるのでこう呼ばれます。英名は「Rustic Bunting」。「Bunting」は独語の「bunt」が語源で「斑の入った」とか「まだらな」という意味でホオジロ類のことと示します。おそらく体色から来たのでしょうか。学名は「Emberiza rustica」。属名の「Emberiza」は「オオジュリン」（すぐがも通信23号参照）のところで触れたように古ドイツ語からきています。種小名の「rustica」はラテン語の「rusticus」が語源で「田舎の」という意味です。「田舎のホオジロ」と言うところでしょうか。きっとカシラダカはヨーロッパでは破れた麦わら帽子をかぶって畠仕事に勤しんでいるのでしょうか。

冬鳥でも特に小鳥は比較的地味なものが多いですが、いずれも遠い北国からの旅人です。暖かい目で見守ってあげて下さい。



オシャレなツル 市川 拓

むかーしある所にとても自分の顔に自信のあるツルがいました。彼女は、仲間の間でもすんゴイ評判の美人、いや美ヅルなのです。ある日、彼女はちょっとエサをさがしに民家のそばまで来ていきました。満腹になつてひと休みしながら、ふど民家をのぞくと、人間の女の人が鏡に向かってにかをしていました。女の人は引き出しから小さな筒のようなものを取りだすと、それを唇にぬっていました。すると、女人にちよっぴり気品のようなものが漂いはじめたようす。ツルには見えました。ツルは思いました。私もあのツツがほしい、もっときれいになりたい！！と。何日かして、ツルはその筒が口紅だということを知り、さっそく手にいれました。（スーパーで買ったのかしら？）ツルはるんるん気分で、自分の顔に口紅をぬろうとしました。しかしツルは鏡を持っていなかったのです。「ウーン、

しかたがないワ。てきとうにカンでぬっちゃえ。」ツルは自分の顔に口紅をぬりはじめました。「よし、これで私はカンベキ美ヅルだわ！」彼女はそう自分で思っていたのです。と一こ一ころが。その次の日、ツルは水を飲みに近くの湿地まで行きましたそして、水たまりに映る自分の顔を見てツルは絶望しました。彼女の顔はキレイなどころか、真っ赤になっていたのでした。マナヅルの顔が赤いのは、それが原因なんだそうです。

身清まる思い-----尾谷司良

私の座っている書斎の壁のカレンダーは今、10月の鳥として水中の葦にたたずむ痛々しく長すぎる程長い紅い脚を揃えた悲しい程優雅でたよりなささえ感じさせる、セイタカシギの姿である。この美しい鳥を心ゆく迄見ることができたのだ。それも1羽どころか20羽近く迄を。駆け出しの身としては幸いと言うべきか。その日はこんな一日であった。10時行徳駅前集合、鳥見姿は同じ様でも皆知らない人ばかり。でも直ぐ気が抜けなくなり言葉を交わす仲となるのが有り難い。20分過ぎ頃出発、幹事の先達で南行20分で妙典地区の蓮田の径に入る。セイタカアワダチ草の群立ちが昔からの草原や葦原を圧する姿に何となくこの耳がうとましく不安さえも感じさせる。でも晴れた晩秋の自然にたっぷりつまれる。蓮田の水は少ないが蓮根や畠物を獲り入れる百姓、淀んだ水に遊ぶ釣りの子供ものんびり受けたましい百舌の声、近い冬に何となく落着きを失った黒雀蜂の忙しい飛び交い。径の行きどまりの水で、アオアシシギが唯一羽ゆっくり人々の眼を楽しませやがて飛び去る。その傍らの木立ちにコサメビタキを見た老練な少年もいたが、私にはとても見つからない。次の葦池で鴨類をみて江戸川の堤に上がる。川は釣り人の舟で埋めつくされているが下げ汐で竿も余り動かない干潟でウミネコの群れに混じって餌とりす

貴重な自然-----河西昭子

9月のおびつ川探鳥会に続いて2度目の水鳥観察を楽しみに参加しました。

今日は種類も数も多く、観察舎からは鳥を眞近に見ることができて、行徳の広い自然とともに秋の一日を満喫することができました。

5月のバードウィークから明治神宮、高尾山などの探鳥会に何回か参加して、そろそろ野鳥の会に入ろうかなと思っています

やっぱり自然はいいですね。すずがも通信に田久保さんが書いていらっしゃるように、行徳に残された貴重な自然はぜひ守りたいものだと思います。

るサルハマシギをハマシギと誤って、幹事の言で成程と感じ入る。昼食が終わってバスに乗る。朝の駅を右に見てやがて下車、保護区に入らせて貰う。鳥群は俄然増えるこんな自然がまだ残っているのだ。心なし鳥ものびのび。あのセイタカシギと、時々混じるアオアシシギの姿に心を残しつつ観察舎を目指し叢の径を行けば生き残って鳴きつづるカンタンの声が風にとぎれとぎれに流れてくる。観察舎前で水に群がる鳥をみて後、鳥合わせ。解散。鳥合わせ数42種。でも私がキャッチできたのはその八割位だったろうか。でも楽しく身清まる思いの一日だった。幹事さん、皆様、どうもどうも。



河西昭子

鴨やしぐの類の名前と違いがわかつておもしろくなってきました。また参加させていただきたいと思います。

水鳥やあわだち草ゆれ日暮れぬ



適材適戸所-----

6日の新浜探鳥会、楽しく参加させていただきありがとうございました。観察舎ではどの椅子にも座ぶとんが置いてあり、居ごこちよく鳥を観察できる配慮ど感心しました。また、日々の鳥の出現記録がわかりやすく展示されていること、手づくりの匂いのする図書室など大変親しみやすい雰囲気でした。実は、先日ある県の「小鳥の森」と称する所を訪れたのですが、森の小径の一角にエサ台の一例として、立派なエサ台と大きな説明看板が設置されているにもかかわらず、エサ台の上に雪が積もっておりエサは全然置かれていません。当然あたりには小鳥が一羽もいませんでした。また「観察小屋」の色ガラズの窓の向こう

杉崎一雄

側にも小鳥はいませんでした。どんなに施設を作っても蓮尾御夫妻のような適材（失礼！）を配置しなければ鳥と人とを結ぶジョイントの役目をする施設はできないと、今日、観察舎を見てつくづく感じました。



自：昭和59年 1月 1日
至：昭和59年12月31日

支出の部

項目	金額	備考
縁越金 会費	270,093.-	
臨時収入	152,080.-	
利子	5,167.-	正月分
	20,303.-	普通 3,982.- 定期 16,321.-
計	447,643.-	
発送費	120,565.-	郵券・封筒
印刷費	33,865.-	紙代・原紙
編集費	6,000.-	
文具費	1,438.-	
備品費	5,500.-	裁断器
腕章	25,600.-	
雜費	900.-	コピー代
計	193,868.-	
60年度 継越	253,775.-	

縁越金内訳

現金	1,265.-
振替	2,500.-
普通預金	3,689.-
定期預金	246,321.-

会費内訳

賛助	18名 + 2,000.- = 38,000.-
普通	83名 + 80.- = 83,080.-
ジュニア	62名 31,000.-

計

152,080.-

上記とは別に郵券残

58,800.-

一事務局より

会費の納入をお忘れなく。一般会員 1000円、賛助会員 2000円以上、ジュニア会員（小中学生）500円。観察舎で預かってもらえます。郵便振替 仙台 2-6129 行徳野鳥観察舎友の会。

観察舎図書室で、毎月第2日曜、3時から編集会議、4時頃から運営会議を開いています。お気軽にのぞきにいらして下さい。たいてい何かしら食べる物がありますよ。

行事案内



*定例新浜探鳥会（毎月第2日曜日） 2月10日、3月10日

集合：東西線行徳駅前 午前10時

解散：行徳野鳥観察舎 午後 2時半頃

担当：田久保晴孝、東 良一

持物：昼食、飲物、防寒具、バス代（大人 190円、子供 100円）

市街化区域に編入されようとしている蓮田でタシギなどを観察してから、江戸川放水路の土手で昼食。放水路ではセイタカシギが親子連れでゴカイを食べている姿も見られます。午後はバスで観察舎へ。6kmほど歩きますので歩きやすい服装、はきもので。

*定例園内観察会（毎月第1、3日曜日） 2月3日、17日、3月3日、17日

集合：行徳野鳥観察舎前 午後1時半

解散：同 上 午後3時頃

担当：観察舎 蓼尾、協賛 友の会

力モの群れを驚かさないようにそっと園内をひと回り。枯れたアシ原の中ではオオジュリンなどの小鳥達がひっそりと生活しています。歩きやすい服装、はきもので。

*夕暮れ観察会 2月24日（日）、3月24日（日）

集合：行徳野鳥観察舎前 午後3時半

解散：同 上 午後5時頃

担当：観察舎 蓼尾

飛びたつ力モの群れや、ねぐらに帰ってくる小鳥達。暮れがたの保護区は昼間とは違う表情を見せてくれます。防寒の用意をしっかり。

*春休み特別行事・不忍池観察会 3月30日（土）

集合：東西線行徳駅前 午前10時

解散：同 上 午後 4時半頃

担当：蓼尾純子、東 鑑子

持物：昼食、飲物、交通費（往復大人 340円、子供 180円）、
動物園入園料（大人 300円、小学生以下 無料）

動物園に入り、新設のバードハウスや不忍池の力モなどを観察します。もちろん、パンダやゾウやペンギンも。お子様連れでお気軽にどうぞ。（雨天中止）



一編集後記

新妻さんが引越し等でお忙しいので、今回のみピンチヒッターで編集を担当しました。
今年から毎号、鳥の特集をくみ、次号の特集は“つばめ”とか。お楽しみに。（鑑）

すずがも通信

No. 30

1985年2月1日発行

発行人	鶴谷 栄
事務局	鈴木 有方
編集人	田久保晴孝 東 鑑子
行徳野鳥観察舎	

